われらの歪んだ英雄

李文烈
藤本敏和［訳］

情報センター出版局



需要全本请访问 www.ertongbook.com

藤本敏和

情報センター出版

英雄



李文烈◉イ・ムニョル　り・ぶんれつ
現在、韓国の若者を中心に圧倒的な人気を誇る超ベストセラー作家。1948年韓国・ソウル青雲洞生まれ。1973年より3年間勤務した軍隊の体験に基づいて書いた「塞下曲」が79年東亜日報新春文芸に入選。さらに同年現代社会での神の存在を問う長編小説「人間の子」で韓国の芥川賞ともいえる「今日の作家賞」を受賞し、にわかに作家としての頭角をあらわす。82年より文壇各賞を総ナメにし、88年には「墜落するものには翼がある」が映画化され、翌年、韓国のアカデミー賞にあたる大鐘賞に輝くなど、文学界は言うに及ばず韓国マスコミ界での話題に事欠かない〝時の人〟である。
〈受賞作〉「金翅鳥」(82年東仁賞)、「皇帝のために」(83年大韓民国文学賞)、「英雄時代」(84年中央文化大賞)、「われらの歪んだ英雄」(87年李箱文学賞)。

藤本敏和◉ふじもと・としかず
1949年　大分県に生まれる。
1972年　東京外国語大学中国語科卒業。
1972年　日本放送協会へ入社。
1979年　延世大学韓国語学堂へ留学。
現在、NHK国際局で国際放送を担当するかたわら、翻訳もこなす。

われらの歪んだ英雄

1992年3月7日　第1刷

著　者　李　文烈
訳　者　藤本敏和
発行者　冨田耕作

定価はカバーに表示してあります。

発行所　株式会社 情報センター出版局
東京都新宿区四谷2－1
四谷ビル　〒160
電話　東京　(3358)0231
振替　東京　4－46236

©1992 Toshikazu Fujimoto
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-7958-1222-5
印刷　萩原印刷所

日本の読者へ

外国の読者に向かいあうたびに、私はいつも自分の使っている道具の不利さを嘆くことになる。美術の線や色、音楽のメロディーやリズムは翻訳の必要がない。舞踊の動作もそうだし、映画も映像は翻訳の必要がない。

しかし、私が道具としている言語は必ず翻訳を通さねば外国の読者と会うことはできない。しかも、われわれの言語はまだ世界の方言の中の方言だ。

日本での出版の話はこれまでも一、二度あった。しかし一度は翻訳をちゃんとしてくれるかどうかという心配から、そしてもう一度は、話のあった作品が私の望むものではなかったためお断わりした。その作品「墜落するものには翼がある」は韓国ではベストセラーにはなったが私としてはあまり気に入った作品ではなく、この作品で日本の読者に初めてお目にかかりたくなかったからである。

さらに正直に言って私が日本での出版をためらうにあたっては偏見も一役買っていた。日本に対して韓国人ほど偏見を持った国民も少ないだろう。私も例外でなく日本に対していくつか偏見を持っていた。

そのなかでも私をためらわせた偏見は、われわれの文学を見る日本人の態度に関することだ。

いうまでもなく人間は、自分が見たいものだけ見て、理解したいことだけ理解するものだが、私にはわれわれの文学を見る日本人の目が特にそのような人間の属性をあらわしたものに感じられた。

何年か前、私は日本のある有力新聞の文化部の記者のインタビューを受けたことがある。そのとき一〇年の経歴を誇る記者の知っている韓国の文学者は一人の詩人と一人の小説家だけだった。それも文学自体としてではなく、ある政治的な事件と関連して有名になった詩人と小説家であった。まちがいなく彼らはわれわれの文学史が記憶しなければならない詩人と作家だ。しかしだからといって、それが韓国文学の代表でもなければ全部でもないと私は考える。

今回、情報センター出版局から私の作品が翻訳されるにあたっては、訳者の情熱に負うところが大きい。

私は不幸なことに日本語をまったく知らず、訳者の力量を測ることはできないが、少なくとも彼が、私の作品に愛情を持って最善を尽くしてくれたことだけは信じることができる。私はそれを信じるがゆえに日本での出版に同意し、出版社の選定もまかせた。

私は日本人は世界でも本を一番たくさん読む民族であり、文化的な欲求と吸収力は世界のどの民族よりも秀でていると、偏見といってもいいほど固く信じている。

需要全本请访问 www.ertongbook.com

私は期待する。私の作品がすこしでも文化の真髄に到達しているなら、日本の読者からも理解され、愛されるだろうと。

日本での出版を前に胸がときめく。

一九九二年一月　遙かソウルから

われらの歪んだ英雄　9
あの年の冬　109
金翅鳥　179

装幀——廣瀬　郁
装画——金　斗鉉

われらの歪んだ英雄

本文中8ポイントの文字で記した註釈については、原著で記されているものはカッコのみで、日本語版をつくるにあたり訳者が新たに施したものについてはカッコ内の文字の頭に「註・……」とつけることで区別した。

需要全本请访问 www.ertongbook.com

われらの歪んだ英雄

I

もう三〇年にもなるが、あの年の春から秋にかけての孤独でつらい闘いを振り返ると、いつもあのときのようにつかみどころのない思いにとらわれ、暗澹とした気持になる。あるいはあのような闘いこそがわれわれの生がよく陥るある状態であり、したがって実はまだ私がそこから抜け出せずにいるために感じる気持なのかもしれない。

自由党政権がまだその最後の気勢をふるっていたその年（註・一九五九年）の三月中旬、私はそれまで誇らしげに通っていたソウルの名門国民学校から、ある小さな町のこれということもない国民学校に転校することになった。公務員をしていた父が風にあおられてそこまで吹き飛ばされたため家族全員が引っ越すことになったのであるが、そのとき私は一二歳で五年生になったばかりだった。

その転校の最初の日、母に連れられて訪れたY国民学校はいろいろとがっかりさせられることば

かりだった。古びた日本式のセメントの建物一棟と、黒いタールを塗った板張りの仮校舎何棟から成るこの学校が、赤い煉瓦で出来た堂々とした三階建ての本館を中心に並び建った新しい校舎を見慣れてきた私には、どんなにみすぼらしく見えたことか。急に、落ちぶれた小公子の悲哀のような途方もない感傷に浸りさえもした。大きいということといいということとは関係ないにもかかわらず、一学年が一六学級にもなる学校で勉強していたせいか、一学年がわずか六学級しかないというのもこの学校をわけもなく見くびらせ、男女が混ざったクラスだけで勉強してきた目には、男のクラスと女のクラスに厳しく分かれているのも田舎じみて見えるだけだった。

加えて、そんな私の第一印象をいっそう確かなものにしたのが職員室である。私がそれまで通っていた学校の職員室はソウルでも指折りの学校にふさわしく広くてピカピカで、そこにいる先生方もスマートで活気に満ちた方々であった。ところが、今度の職員室には田舎のおじさんのようなよれよれの先生たちがわずか教室ひとつの広さの中に気が抜けたみたいに座り、煙突のように煙草の煙ばかりしきりに吐き出しているのだった。

私を連れて職員室に入った母に気づいてこちらにやってきた担任の先生も、私の期待とはあまりにもかけ離れていた。きれいで優しい女の先生とまではいかなくても、あたりが柔らかくて慈愛に満ちた格好のいい先生ぐらいにはなるのではと思っていたのに、どぶろくの飛沫が白くこびりついた洋服の上着の袖からして期待はずれであった。整髪油をつけていないのはもとより、櫛さえ入れずボサボサになった頭に、朝、顔を洗ったのかさえが本当にいぶかられる顔で、母の話を聞いているような聞いていないような彼が担任の先生になるということに、正直言ってどれほど失望したこ

とか。その後一年にわたる悪縁が、そのときすでにある予感として感じられていたのかもしれない。

その悪縁はしばらくして私をクラスの子供たちに紹介するときから、早くも姿を現わしはじめた。

「新しく転校してきたハン・ビョンテだ。これから仲良くするように」

担任の先生はそのひと言で紹介を済ませた後、私を後ろのほうの空いた席に座らせ、すぐ授業に入った。

新しく転校してきた子供に対してオーバーにも感じられるほどいいことずくめの紹介を並べたてたソウルの先生たちの優しさを思い起こして、私は恨めしさを抑えることができなかった。大仰に持ち上げることまではしなくとも、最小限私の自慢の種はクラスの子供たちに教えてやり、それが新しく始まる彼らとの関係に助けとなることを私は願っていた。

そのとき私には威張れるものがいくつかあった。まず勉強。一番にはそんなにいつもなれなかったが、それでも私は名にし負うソウルの一流学校でもクラスで五本の指には入っていた。そのことは、先生のみならず子供たちとの関係でも私の利益を守ってくれるのに少なからぬ役を果たした、私の密かな自慢の種であった。また、私は絵にも人並み以上の腕前を持っていた。もとより全国子供美術大会で賞をさらうというほどではなかったが、ソウル市規模の大会では何回か賞を獲るほどの腕前ではあった。私の成績と併せてその点も母は何回も強調していたようだったが、担任の先生はそのすべてをきれいに無視してしまったのである。私の父の職業も場合によっては私の力になりえた。風にひどくあおられソウルからそこまで飛ばされたとはいっても、私の父はその小さい町では何本かの指に入るくらいの職級の高い公務員であった。

薄情なのは子供たちも担任の先生と同じだった。ソウルでは新しい転入生が入ってくると、子供たちは休み時間になると待ちかねたようにその子供をぐるっと取り囲み、あれやこれや尋ねるのが普通だった。勉強ができるのか、力は強いのか、家の暮らし向きはなど、いわば後でその子と結ぶようになる関係の基礎となる情報収集であるわけだ。

ところがその新しい級友たちは、担任の先生と同様にそちらのほうには別に関心はなかった。休み時間には向こうのほうに立ってちらちらと盗み見するだけだったが、昼飯のときになってやっと何人かが押しかけてきて聞くことはといえば、たかが、電車に乗ったことがあるか、南大門は見たか程度のことか、せいぜい私しか持っていない学用品を見てうらやましがったり感嘆するくらいであった。

しかし三〇年近くにもなる今日まであの転校初日のことを生々しく覚えているのは、なんといってもオム・ソクテ（厳石大）との出会いのためであったろう。

「みんな、どけ！」

子供たちが私を取り囲んで先ほど言ったようなたわいもないことを聞いていると、突然彼らの背後から低い声が聞こえてきた。事情のわからない私には担任の先生が戻ってきたのかと思われるほど、大人びた変声期の声だった。子供たちがぎくっとして飛び退いたので私までびっくりして振り返ると、真ん中の列の一番後ろの席の子供がふんぞり返ってわれわれのほうをじっと眺めていた。

まだ、同じクラスになってから一時間しかたっていなかったが、その子供だけは私にも見分けがついた。担任の先生と私が初めて教室に入ってきたとき、気をつけ、敬礼、の声をかけたところか

需要全本请访问 www.ertongbook.com